

MOVIE
MOLAM
BAKUON
ISAN
THAI



「爆音映画祭2019 特集タイ「イサーン VOL.3」

イサーンからワンメコンへ!

東京都写真美術館ホール

MOVIE

『ザ・ムーン』『暗くなるまでには』
『カンボジアの失われたロックンロール』『音楽とともに生きて』
『ラップ・イン・プノンペン』『モンラック・メーナム・ムーン』
『東北タイの子』『花草女王』

TALK

スリン・パークシリ

宮崎大祐 空族 Soi48 OMK 楠口泰人

主催:boid 空族 Soi48

協力:オリエンタルブリーズ タイ・フィルムアーカイブ 東京国際映画祭 大阪アジアン映画祭

助成:国際交流基金アジアセンター



KUZ 空族

Soi48



ASIA center

今を逃したら、もう暫く観ることができない珠玉の8本!タイ音楽をもっとも進化させた鬼才スリン・パークシリも来日!

There's a Riot Goin' On

2018年夏のケン・ナリンク・エレクトリック・ビン・バンドから約半年。3回目となる「爆音映画祭2019 タイ|イサーン特集」のライヴでは、再びアンカーン・クンチャイさんを招き、「パンコクナイツ」でも観ることのできた彼女の姿はあまりに凛々しく、われわれを一気に時間の果てへと連れ去る一直線の視線とともにあったと思う。われわれは今どこにいるのか、という問い合わせが生まれる。この日本、この東京、あまりにはかけていて冗談ではないかと思うものの冗談ではないこの日本で生きるしかないわれわれの身体がかけがえのないこのひとつしかない悲しみが、彼女の歌声とともに湧き上がる。その悲しみとともに怒りばかりが身体を責めていたのだが、急がば回れ。彼女の歌声とともにこの東京からイサーンを経て世界の果てへと心と身体をゆっくりと広げてみる。いくつもの映像がわれわれの身体を貫き通すだろう。

そして今回の上映はイサーンだけではないタイの各地、あるいは国境を越えてカンボジアへと広がる作品をラインナップした。その風景と歴史の中で、われわれは生きる。いつの日かこの東京のゆがんだ風景も、それらの中にゆっくりと飲み込まれていくだろう。笑えない冗談には、そんな果てしない未来からのほほえみを返すことにして。われわれは今、そんな微笑みの中にいるのだ。

There's a Riot Goin' On

樋口泰人(boid主宰/爆音上映&爆音映画祭プロデューサー)



『ザ・ムーン』

Pumpuang

2011年/タイ/127分/デジタル

監督:パングラード・ソンディー
出演:バオワリー・ボーン・モン、ナタヴァット・サキットジャイ、ワタヤ・ジェータバイ
提供:SAHAMONGKOLFIM International Co., Ltd.
© ALL RIGHTS RESERVED
1/25(金)18:19 1/26(土)17:55 1/26(土)17:55 1/26(土)17:55 1/26(土)17:55 1/26(土)17:55

1992年に30歳で病没後、『ザ・ムーン』はタイで国王の写真と共に置かれるような「歌聖」として祭られる伝説の歌姫ムブワン・ドゥワンチャンの伝記映画。貧困家庭に生まれ、恋愛、様々なトラブルに遭いながらも力強く、タイ国民にエンターテインメントを提供し続け「ルートゥン女王」と呼ばれるまでになった彼女。その短く儚い人生をコメディ要素を交えず描きタイ国民の涙を誘った。この映画をきっかけにブレイクすることになった、主演女優に抜擢され人気歌手となったバオワリー・ボーンビモンの演技も必見。(宇都木景一)



『暗くなるまでには』

By The Time It Gets Dark

2016年/タイ・オランダ・フランス・カタール/105分/デジタル

監督:アーチャー・スウェイチャゴーンボン
出演:アーラック・モーンスバカリ、アビンヤー・サックジャルーンスック、アッチャラー・スワン
提供:LUXBOX
字幕提供:大阪アジア映画祭 © ELECTRIC EEL FILMS
1/26(土) 13:00 宮崎大祐トーク

監督の生まれた1976年。タイではタンマサート大学における左派学生や市民活動家などの集会を警察組織が攻撃して数10名の死者と150名を超える負傷者を出した虐殺事件が起こった。タイはその日のうちに軍事クーデターが宣言される。本作は、その集会に参加して、その後小説家になった女性への、女性映画監督によるインタビューから始まる。タイの現在と過去が交錯、混乱しながら作家のインタビューを通し、あるいは映画監督の視線を通し、そしてまた自分自身として登場するタイの俳優たちの言葉を通して、それはもはや「語り」なのか、「現実」なのかもよくわからない。いくつものエピソード、いくつもの現実、いくつもの夢、それらの断片が重なり合い、タイの「現在」が浮かび上がり、そしてそれは世界に向けて開かれしていく。世界各国の映画祭で上映、評判を呼んだ斬新な手法と今を見つめる視線は、日本の今にも確実に関わってくるはずだ。(樋口泰人)

『パンコクナイツ』の撮影現場でYOUNG-Gが一番多くかけたのは、なぜかカンボジアの曲だった。あの強烈なタイ・ラオスでの撮影期間、ずっとテーマ曲であり続けたSELEYLEAKの歌声。

矢も楯もたまらずYOUNG-Gは、カンボジアの首都ブンペンに“KlapYaHandz”を訪ねていた。

富田克也(映画監督)

家の行方もそこで途切れ、その後を知るのは誰もいない。『音楽とともに生きて』は、ポル・ポト時代とそれ以前、そして現在という3つの時代を、シーサモットの曲「バッターンバンに咲くブルメリア」という曲を軸に描いている。当時、タイ国境側の難民キャンプで生まれ、その後アメリカ渡った共同監督のひとり、ケイリー・ゾー。そして同じく共同監督のヴィサル・ソックはフランスへと難を逃れた。これまでタブーだったポル・ポト時代について、新しい世代である彼らがついに語りはじめたのだ。そして、そのきっかけは彼らの記憶に残る音楽から手繕り寄せられていく。(富田克也)



『カンボジアの失われたロックンロール』

Don't Think I've Forgotten: Cambodia's Lost Rock And Roll
2014年/アメリカ・カンボジア/106分/デジタル

監督:ショーン・ビラジー
音楽:スコット・スマフォード
出演:シン・シーサモット、ロセレイソティ、パイヨン・バンド
提供:ショーン・ビラジー
字幕提供:東京国際映画祭
1/26(土) 15:45

長らく日本未公開だった悲劇のカンボジアン・ロックの歴史に迫ったドキュメンタリー。1975年4月17日、かつて"アジアの真珠"として知られた首都プノンペンがポル・ポト率いるクメール・ルージュによって占領され、ロン・ノル政権は崩壊、同時にカンボジアのロックンロールも悲劇的な終わりを迎える。多くの知識人同様にポップミュージックにおけるスターたちも拘束され処刑され、レコードを破壊、クラブも閉鎖、西洋風の音楽、ダンス、洋服も厳しく法に触れるものとなつた。生存者へのインタビュー、シン・シーサモット、ロ・セレイソティといった伝説の大歌手知られざるアーカイブ映像から失われた歴史が甦る。サウンド・トラックはDUST TO DIGITALから発売され、ワールドミュージック・ファンのみならずロックファンの間でも話題を呼び好セールスを記録している。(宇都木景一)



『音楽とともに生きて』

In The Life of Music

2018年/カンボジア/91分/デジタル

監督:ヴィサル・ソック、ケイリー・ゾー
出演:ヴァンクリス・ヘン、スレイイン・チア、ソナ・カニカ
字幕提供:東京国際映画祭 © Innovation Pictures
1/27(日) 16:45 宮崎大祐トーク

カンボジアの音楽を振りはじめるところから見えることになる名前がある。シン・シーサモット。キング・オブ・クメールミュージックだ。フランスの植民地であったカンボジアは東洋のパリと呼ばれ、早くから楽器と共にジャズやラテン、ポップス、R&Bが伝わった。その後、カンボジアはフランスからの独立を果たすが、今度はベトナム戦争によってアメリカ軍と共にロックンロールが入ってくる。シーサモットが活躍したのはこの時代だった。60年代、彼は世界中を席巻していたロックにカンボジアの伝統音楽を融合させ、後にクメールロック、クメール歌謡と称されるジャンルのオリジネーターとなる(詳細は「カンボジアの失われたロックンロール」に描かれる)。その頃、ここカンボジアでもタイと同じく親米軍事政権が誕生し、アメリカの傀儡ロン・ノル首相は、シーサモットをプロバガンドとして利用した。その後、反米勢力であったポル・ポト率いるクメールルージュは、それらすべてを西洋文明からの汚染源として破壊し、シーサモットをはじめ、多くの歌手や作曲

よりも“生命の躍動”が描かれていたからであろう。注目はやはり村に錦を飾るモーラムだ。登場するアンコンは再来日するアンカーン・クンチャイにも影響を与えたモーラムの詠い手である。進化を続けるイサーン音楽、モーラムにぜひ体を揺らしていただきたい。(相澤虎之助)



『モンラック・メーナム・ムーン』

Mon Rak Maenam Moon

1977年/タイ/114分/デジタル

監督・脚本:ポンサック・チャンタルック
脚本:ニコット・シーバップムック
音楽:スリ・パークシリ
出演:ソンバット・メークー、ナオワラット・ユックタナ、ノバドン・ドゥアンボン
提供:Boonserm Kietmingmongkol © Boonserm Kietmingmongkol
※登場するマスクは尼国により映射材の映射・音声の状態が悪くお見苦しいことを、あご丁承ください。
1/27(日) 13:30 スリン・パークシリトーク

70年の伝説的音楽映画『モン・ラック・メーナム・ムーン』のヒットを受け制作された幻のイサーン映画。ウォンラチャタニーを流れるムー川を背景にイサーン人の生活を描く。ダオ・バントン、テッポン・ベットウボン、シープライ・チャイプラなどルートゥン、モーラム歌手が大集合。イサーンのコメディー王ノバドン・ドゥアンボン、電気ピンを発明したトーンサイ・タップタノンが所属するお笑い楽団ベットビントーンも映画に華を添える。イサーン音楽の重要人物であり作詞家でもあるポンサック・チャンタルッカーガ監督となり、音楽プロデューサーのスリン・パークシリに「イサーン版『モン・ラック・ルートゥン』を製作してくれ」と依頼。イサーン音楽界が総力をあげて製作した傑作音楽映画。(宇都木景一)



『花草女王』

Rachinee Dok Ya

1977年/タイ/114分/デジタル

1986年/タイ/125分/デジタル
監督:スンチャーパタム
脚本:スルル・クラウド
音楽:ボンサック・チャントルック
出演:プロームポン・ノット、チャウイーン・ダムヌン、トーンカム・ベンディ
提供:SF Cinema City © Suwat Thongromo
※登場するマスクは尼国により映射材の映射・音声の状態が悪くお見苦しいことを、あご丁承ください。
1/27(日) 11:00

モーラム楽団をコンテストで優勝させるためにパンコクの青年とイサーン人達が知恵を絞り伝統音楽を進化させる音楽映画。社会派映画と異なりパンコクとイサーンの格差、都会と田舎の文化の違いを面白く軽快に描いている。『モンラック・メーナム・ムーン』で監督をつとめたポンサック・チャンタルッカーガが音楽を監修し、臨場感あふれる当時のライブの様子、スタジオ風景が映っている。そして伝説のモーラム楽団、ランシマン楽団のチャウイーン・ダムヌンとトーンカム・ベンディがコンビで出演。パンコク青年にモーラムの基礎を教え込むために様々なモーラムの型を披露するシーンはこの映画の見所だろう。製作された86年から現在に至るまでイサーンの野外映画やお祭りで上映され、娯楽を愛すイサーンの心をつかんだ人気作。単純で解りやすいストーリーは心地よさ200%。(宇都木景一)

バンコクナイツのエンディング曲「イサーン・ラム・ブルーン」の生みだした、スリン・パークシリが遂に来日！

スリン・パークシリ Surin Phaksiri

1942年生まれ、アムナートチャルーン県出身の音楽プロデューサー。

異なったジャンルや形式の音楽を混ぜ合わせる発明的な手法で名高く、

モーラムとルートゥンを合体させたアンカナーンチャイの「イサーン・ラム・ブルーン」はその代表曲の一つ。

ヒットメーカーとしても活躍しつつ刑務所の監視員も務め、勤務中に歌詞を書いていたという逸話を持つ。

映画音楽の作曲、TVの司会者、ラジオDJとしても活躍したタイ・イサーン音楽界の重要人物。

TIMETABLE

1月25日(金)		1月26日(土)		1月27日(日)	
18:15	『ザ・ムーン』	10:30	『東北タイの子』	11:00	『花草女王』
		13:00	『暗くなるまでには』 宮崎大祐 トーク	13:30	『モンラック・メーナム・ムーン』 スリン・パークシリ トーク
		15:45	『カンボジアの失われたロックンロール』	16:45	『ラップ・イン・ソノバン』『音楽とともに生きて』 空族+OMK トーク
		17:55	『ザ・ムーン』 soi48 トーク		

当日1回券 上映のみ1500円／トーク付き上映1800円

※当日前10:00より、その日の全ての上映回について販売を開始いたします。※現存するマスター起因により上映素材の映像・音声の状態が悪くお見苦しい作品もありますことを、予めご了承ください。

・全席指定／190席／各回定員入替制／立ち見不可／事前予約不可・満席の場合、ご入場をお断りいたしますので、予めご了承ください。開場は各上映開始時間の10分前を予定しています。

ACCESS

TOP MUSEUM

東京都写真美術館ホール

JR恵比寿駅東口改札より徒歩約7分、東京メトロ日比谷線恵比寿駅より徒歩約10分

恵比寿ガーデンプレイス内

TEL 03-3280-0099(代表)

www.topmuseum.jp

映画祭の問い合わせ:boid TEL 03-3203-8282

www.bakuonthai2019.com

